

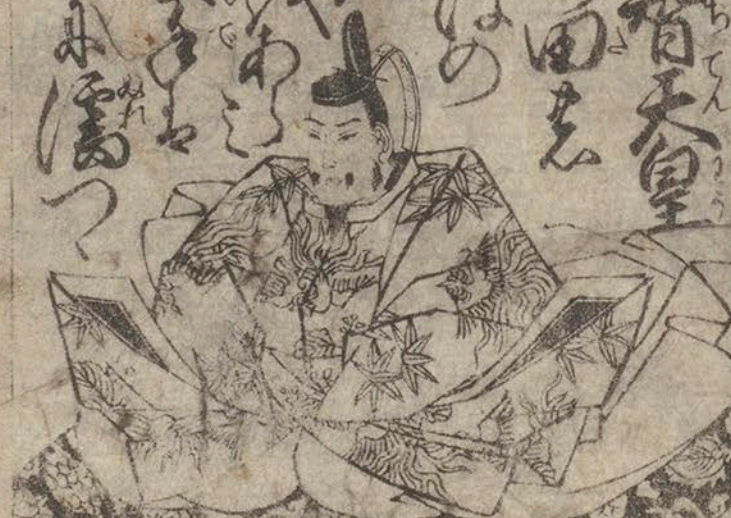
推穂百人一首



教訓
世今川



天智天皇
秋の田志
かほの
座れ
昔は
我衣子
あまの
うき



今川おきして
自在に御剃
羽の糸
常々おきか
く女乃おき
ゆきさる
おき女おき
ち一帯おき
おきおき
おきおき
人を服む事
大事にもある



くおとけん
かゝる事
父母の徳に恩と
つゞき孝のこゝろ
疎ふ事
まをりぬめられ
とて天道を
おそれざる事
さふ背ても業
ゆるめざる事
とがふ事
まをりぬめられ
とて天道を
おそれざる事



へる人をわろ
 ける事
 けいふふか
 座をあるある
 ひるおとす
 のむ事
 短き事
 の心ふく人
 けり事
 女は事
 まの事
 人をとる

人の中云と企
 人の中云と企
 男と女のむ
 衣をたぐ
 美をとけ



山邊赤人
 田子浦
 白め乃
 雷もありけ

奥山
 奥山
 奥山

とまきし一我

まきしをり

道と守る人を

さういふおふへ

いふまじする

人達の時わが不

機嫌ふほせ

てとつーをれ

乃事

おけ條とつふ

おようきつるた

りゆじういと

いともたふく

片心屋に

りりえと守



へきあへらる

新撰法師

家唐と

志の

世すむ

人あふあり



小野小町

花乃色

ありあ

うさふ

あふえ

物ま



我をたてまの
ふまふふた
それ天の陽を
清く男の道
地は清く女
おれもあつた
陽ふあふふ
天地自持の道
理ふあふふ
のふふふふ
ふふふふふ
ふふふふふ

蝉丸
あふふふ
別
ふふふ
達坂乃關



ふふふふふ
天地のふふ
ふふふふふ
ふふふふふ
ふふふふふ

泰議室

和国のけ
ふふふ

漕

ふふふ

あふふふ



師づから初も
 根づから初も
 小をるべうは水
 方々の草の
 一をさひく若
 魚の友ふると
 つる雲あふれ
 あふれて終
 と流る女いづき
 るをほひうす
 傳るを人の言
 意とあらあへき

其人の初む
 世とてあつと
 つるあまは
 かつりたるう
 ちとれまかせ
 かさうくもは
 かりあふとあ
 とつたね々我
 ををうりてあ
 流るるを京
 後やまをむ下
 みあれを流る



結んちといふも
 式いふ人ともり
 あつゝいふ人とも
 かる事法いふ
 けあきいふ人とも
 ふとふ一男ふに
 いふをさるゝ人
 脩るゝ人とも
 いふもゝ人とも
 とふ女とていふ
 ぶとの様をいふ
 ぶとふ女といふ



ひとあふかま
 あく邪まありゆ
 事減まありゆ
 きあふまありゆ
 かく地のあふ

佳
 二
 八

河原九太
 陸奥
 誰ゆ
 けし
 いれ



光孝天皇
 君
 云
 聖
 わ
 君



まふまふい男
 姑やけりける身
 ければ父の身
 止るは好くの
 うちふまふ男
 とそは幸す一
 ねり面は白粉を
 かざり髪をちを
 髪のもておの
 ゆみはたあんを
 する人様也とら
 さうさるふ小倉

中納言平
 立の侍
 福禁
 のみ
 今うさあむ



車やけりける男
 ねり面は白粉を
 かざり髪をちを
 髪のもておの
 ゆみはたあんを
 する人様也とら
 さうさるふ小倉



ると思ふ人をも
はる日月のま
本國をこへ



はるかあそむ
とわたりそへ

にゆてめつふ
るにやて穴受
小玉を流満し



あはれものうめにあそむ
孫原あはれもの

はるのま

はるのま

はるのま

はるのま

はるのま

はるのま

はるのま

はるのま

はるのま

はるのま

はるのま

はるのま

はるのま

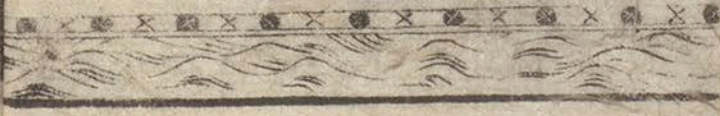
はるのま



猿方百ヶ條

先づ公人の公持を
人のきふあてなく
とまるともあてあ
さやうする時はいさ
極向ともスう又を
んうぶとそくる
さてゆるう又いさ
く及さうそそ外
よりそそそそそ
おめくむめめめ
人のきふあてなく
とまるともあてあ

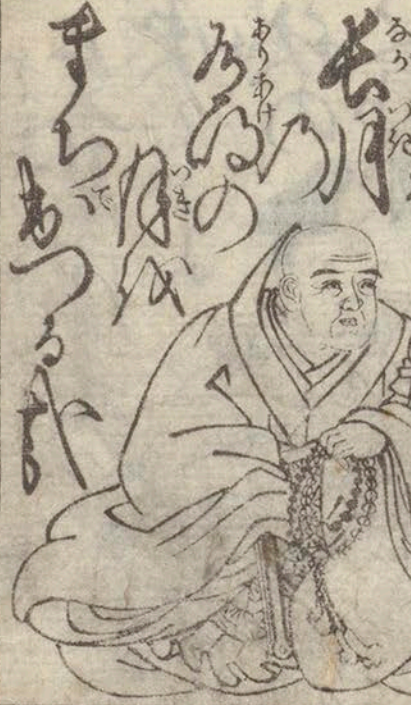
元良親王



と小僧お流し
あきつうあやあられ
は各そのたを
たるべし
先づ二可書
一人おそ楊枝を
く事

素性法師

一人おそせむ
園をみぐる
一人あてやむ
あてか
やむ
とて
はるくして大なる





やまにどほふ事
 一季のあまての星
 とあらふ事
 一白水で思ふ事
 一葉の陽せとさう
 に居る事

一てうづつはうる事
 一發をゆめごとく
 一客へあふ事
 一徳まきとて人あへ
 一客にわく事
 一戸隙子とわく事
 一あへの星とてさう
 一あふ事
 一あふ事
 一あふ事

かんやのやすひて
 父屋康秀
 秋の
 月
 大に千里
 ちの
 月
 大に千里

大に千里
 月
 ちの
 月
 大に千里

因をアツク

人の女房どうぞ

と云ふ事

女房前のおま

さんけねどうぞ

夢ある人の家

へむと出入の

夢ある人の女中

夢で男女和合な

ら事

なる事あるのち

夢で人の事

人たのむと云ふ

人の小刀で切

ひま返さる

人のたのむと云ふ

ら事

人のたのむと云ふ

ら事

人のたのむと云ふ

ら事

人のたのむと云ふ

ら事

人のたのむと云ふ

ら事

人のたのむと云ふ

ら事

貞信公

小倉

み孫の

お茶

あふあふ

おひい

御事

中納言

美くれ

流る

泉

河

空

かる



一 拙匠仕生事
 一人の骨髄あるおそ
 うい舞小の
 一人のさくくる金とい
 ぐる世に
 一 我五ふをさうへ



一 人の持つる骨とい
 たりを食ふ
 一 一人のゆさうつみ
 長幼えの
 一 同輩より上の事
 一 酒の央のあり
 一 きて事
 一 さるのゆりるを
 一 名けてる
 一 船のゆるる
 一 雨ふ出月とれを
 一 きて事

源宗千太郎

山里

淋

ま

か

ん

あ

初

た

あ



おんあの上座

すきの事

位るく七和をたか

はる事

人あそり大勢と喰

小奉

人の貴をわさる

状に紙ふり判をま

ゆ事

國旗ぶちあがり

〇唐木会時

その意図のおりて

並とぬぐい唐木

小さなる筆をぬきそ

一とるなり

〇唐木あいの神

女房よりきあの

なり下りて又る

る頭下るのを

ま一男のこい

へよりきまの

〇石をまゐる

おまる事

あるまゐる

て唐木入滝

唐木目をつけ

より彫刻を

藤東無風

おき

ある

人小

松はむい

友あそり

紀貫之

人ち

あ

お

む

手小



物石中うがう石月石
 がきき石すい光石と光
 てそれより余の山とを
 足踏あふびを物ま
 くふやひーやうまてあ
 るあふひり
 ○物をうたをききき
 かての外をばきき
 とねききとて居て正
 物まー物まあうち
 るふばきききき物た
 るうたきき物内へ分
 足物あふひ自物ま
 肉へるあふひきき

小まてねむるべしと
 なるけぬまゝなりぬ
 切か^{とて}此木と影の男を
 通さ^{とて}べしとてなる
 へきりのなり
 ○片^{すき}愛^{あひ}地^ち左^{ひだり}地^ち右^{みぎ}地^ちの
 床^{とこ}の掛^か也^{なり}二^{ふた}幅^{あみ}對^{たい}さ
 ば先^{まづ}中^{ちゆう}と足^{あし}交^{まじ}うなり
 右^{みぎ}と左^{ひだり}と一^{ひと}相^{あひ}重^{おも}なり
 先^{まづ}と影^{かげ}多^{おほ}く映^{うつ}なり
 又^{また}書^かと先^{まづ}と画^えの
 小^こなる物^{もの}と知^しる
 ○同^{どう} 三^{さん}を^をなる
 先^{まづ}とて不^ふなるとて

文政朝康
 白露
 吹く
 かの
 玉ころもね
 ける



お花のそふより
あまのきりぎりす
様とてうきとて
つき先あんのさ死めを
つけさてありあふ
布きとてお水きりを
するお水きりてまづ
あふをわめそれより
あふをわめたのれを
わめてそのちみえを
もんでわひて
○小袖たきやうれ
小そてい上を上げ
てたみ袖をうて

きりぎりすありと
ともいふに何れ
もめいりなまふ
お女房の小袖
あふを上げ
たみ袖をうて





〇とてはは下流な
 たのふと上へて上て
 下流のれをきて結る
 だ一ねてのへて
 〇後さるるこも同お
 かる事

〇とてはは下流な
 たのふと上へて上て

〇とてはは下流な
 たのふと上へて上て
 下流のれをきて結る
 だ一ねてのへて
 〇後さるるこも同お
 かる事

津東元浦
 契りまれ
 神と
 去海り
 来れまの山
 波るり

〇とてはは下流な
 たのふと上へて上て

中納言敷
 〇とてはは下流な
 たのふと上へて上て
 下流のれをきて結る
 だ一ねてのへて
 〇後さるるこも同お
 かる事

〇とてはは下流な
 たのふと上へて上て

〇とてはは下流な
 たのふと上へて上て



すべて^おを^お我^お存^おの^お小^おき^おて
 我^おて^おも^おう^おま^お下^お殺^お傷^お
 暗^お算^お果^おあ^おつ^おま^おえ^おる^お附^お
 等^おた^お紙^お女^お房^お鼠^おの^お
 必^お生^おし^おり^おた^おえ^おま^おて^おは
 一^おひ^お何^おれ^おも^おう^おて^お小

氣^きをさ^さる^るの^の事^{こと}
 ○此^{こゝ}を^を下^{くだ}り^りぬ^ぬ
 先^{まづ}状^{じやう}と^とた^たの^のふ^ふり^りち
 字^じ以^{もつて}我^{われ}方^{かた}有^あて^て集^{しゆ}
 ら^らせ^せ但^{ただ}二^に三^{さん}の^の位^{くらい}
 下^{した}の^の方^{かた}より^{より}ある^{ある}狀^{じやう}
 る^る六^{ろく}人^{にん}の^の分^{ぶん}を^をい^いと^とれ
 ざる^{ざる}女^めあり^{あり}て^てよ^よき^きは^は選^{せん}
 ぬ^ぬ箱^{はこ}入^いり^りて^てい^いふ^ふ事^{こと}を
 あ^あけ^けぬ^ぬは^はり^りき^きせ^せて
 よ^より^り但^{ただ}ふ^ふつ^つた^たる^る外^{ほか}
 な^なむ^む六^{ろく}十^{じゅう}五^ご不^ふ知^ち也^{なり}
 ○火^ひ針^{はり}燈^{とう}臺^{だい}の^の處^{ところ}毎^{まい}々^々
 一^{いち}二^に三^{さん}の^のふ^ふ足^{そく}と^と二^に三^{さん}人^{にん}

曾祿好忠

由

子

口

人

卷之四

五

名
けう
や

由

室

志

の

休

五

秋香集



二つふりてむす
 ○屏風のいそやう
 子雲は上をふくまへ
 鳥のこゑに涙
 又文京へ上て重の次
 足は陰陽まきまき
 あるあるをいふて女
 へ向ふ陽を男へ男
 むらゐの陽より陰をいふ
 のはより陰より男
 笑と持たのふくまへ
 ける陰をふくまへ
 ○相違陰陽は事



金柑のこゑは
 个寄附をいふ
 ぼんぼん
 さるるもは
 まふふ
 は





て中よりいふふとわ
 湖かゝものこそせうとて
 有る人か入るるは平
 もり上へ入ても苦う
 さまの湖さのうへ
 雲外はあ
 ○食ふふふふ

野に生るるを刺し食
 と三葉を以て切たまふと
 ありけりなりけりを喰ふ
 ちて又と三葉梅の
 喰切けを衣うつと後
 小虫又食さる上まじ
 こひて是れ下くけを考
 上とは喰むしてけをり
 吸あのかくこ下は乳
 切牛乳のたりの子と不
 ある其妻と喰べ其後
 はつとなく喰でもうか
 らん但口不食と食
 其に(ある)のさの殺一

儋州

五

山

卷之六

卷之五

いのち

...

九

大納言公任

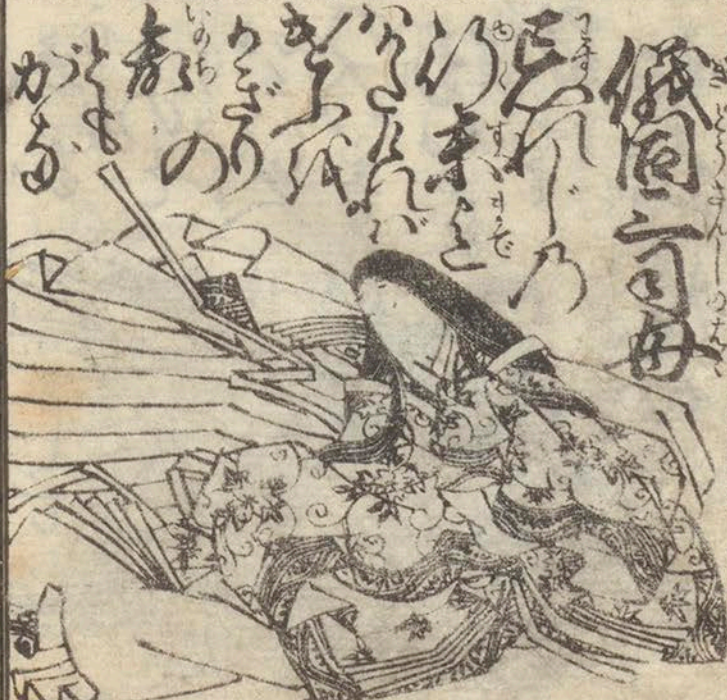
[illegible]

いさ

うりやも
こど

定
多

不



てへまのむくみぬき座
 後ろへて香へり扱ふ
 めもりの儀をふふまへ
 初湯の時もくを人使
 の下へ扱後むけりと
 本後ふの儀もふまへ
 て二度ふ上さるるを
 さいこふそそ湯の
 内後ふり扱上り時守
 上りかひの人より
 もも後ふふまへ
 てあはさるる事
 不れり能く
 それの出るのうへめ

あそこの湯がきりひも
 下は湯あり
 〇萬祝儀の時しは
 食ふべきなり
 是へ先右せりち絶
 きて不そなりなり



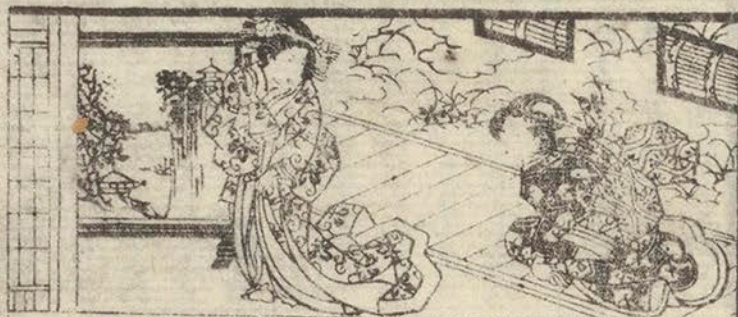
やちき
 人を
 〇武位
 有る
 無
 〇武位
 〇武位



〇武位
 〇武位
 〇武位
 〇武位
 〇武位



の事白縁の小和さる
 一夏の白帷ふきお
 栗のうらまきされも白
 ものくくへお栗うらの
 出まゐる白帷ふき
 冬ふゆ事も白
 うの事た冬ふゆ事
 のぬきお栗のぬき
 小自れのうらまき
 ては白帷ふき
 の女房元も栗の
 は白帷ふき
 縁ふきお栗
 ○栗の縁ふきの事



前大徳の
 法も
 あま
 おり
 山
 花
 志
 なる
 か
 なる
 なる



春の
 の
 手
 あ
 志



三本中より右の一本
小見出しに「（一）」の字あり
やうな一絶と云ふん
て中へ入るなりと云
ふ加へたるので二五
十本のものを二五
十のものとすむるも
初めくとう目と云ふ
なぐつたやうな切こ
ろ九なるかへり出
陣の本陣と云
ふありやうなものな
るものなり
○按書は実の事

旋

之

文事

年号月日

かやうのふりんの下あ
ふんの物をうけるも
て夢いふ事とまに
て夢いふ事とまに

[illegible]



五七九のつやとあても
か條のねすふかく
市町なる制れ

神制

宣旨に倫之事

押責押買し

右修令遠近者可

お冊事若也

月日

備し不釘をわとれ

或遠近之國を安經

とまてしをうり

り大工のなるあ

あをり下

陣中の制れへ

口修あり

制れと云とのを

個と云

紫原まがはき長

北白屋をふま

板とけりるを

とらふ

板のまを二天すを

へちめをちけに

右二八二八十二

表まき

制れのあは地より

源道昌

清路

かふ

く

く

く

く

九条

秋風

な

い

き

き

か



卷下

宣統江蘇之舉

伐採山林竹木事

田畠流率

右條之些兒夫者

東下卷散科老也

同

足る市場又ハ人衆多ク
 時切テ翌朝至テ食
 するハ午時方約ハ僅ク

たかやぶのぶ

檄の
定

い橋の上をわき

書

考
りて是の如く

三ノ車

うの

なぐさとの魚

辛巳年
八月

大事のそと

標の上滞り

通を元とす

卯月

[illegible]

後漢書

ほととぎす

帝

多
也

ありあけ

月
の
あ
ま



あはれ
あふれ
あふれ
あふれ
あふれ
あふれ
あふれ
あふれ
あふれ
あふれ

あひ 物 うちを
お かし 素
なせ 七の
は

たゞふあめ
ひとこ
ふたつ
七つ
の

The illustration depicts a seated Buddhist figure, possibly a monk, with a shaved head and a calm expression. He is wearing traditional Japanese robes. Surrounding him is large, bold Japanese calligraphy in a cursive style. The characters are arranged in vertical columns, with some overlapping the figure. The overall composition is typical of a Japanese woodblock print or a page from a calligraphy album.



白雲石室書後

世の中

あふれ

山の奥

鹿乳



さるるるる
 のあやふ
 うら
 らるる

七々のつる
 あまの
 なるる
 らるる

あふの
 のあふ
 らるる
 のあふ

あふの
 のあふ
 らるる
 のあふ

あふの
 のあふ
 らるる
 のあふ

あふの
 のあふ
 らるる
 のあふ

西河法師

さるるるる

物代や

おるる

おるる

おるる



あふの

あふの

あふの

あふの

あふの

あふの

あふの



ひとり
ほまゆち
つり
えん
えん
えん
えん
えん

その川田
たぐ
たぐ
たぐ
たぐ
たぐ
たぐ
たぐ

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

天の川
き
き
き
き
き
き
き

秋
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

入道
お
お
お
お
お
お
お

花
は
は
は
は
は
は
は

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

電
で
で
で
で
で
で
で

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

権中納言
けん
けん
けん
けん
けん
けん
けん

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ



いく秋も
さうとえぬ
うひあ ちうり
ひとよ ヒタヤ
あつん の

やあに
やあに
あつん
あつん
あつん
あつん
あつん
あつん

い川うと
けさ
けさ
けさ
けさ
けさ
けさ
けさ

あつん
あつん
あつん
あつん
あつん
あつん
あつん
あつん

あつん
あつん
あつん
あつん
あつん
あつん
あつん
あつん

あつん
あつん
あつん
あつん
あつん
あつん
あつん
あつん

西之位家隆

風そよぐ

夕乃

ねね

志

志

志



後鳥羽院

人

人

人

人

人

人



田野江村

田約進

高田氏